自文政四年
至同十年

御用留

四

特別
ト2
1897
4

門 ト 53
號 1951
巻 4

明治廿七年二月五日
内田銀蔵氏寄贈

門 ト 2
號 1897
巻 4

一 韓印紀〻〻
一 釋尊〻〻
一 史料清史料寄ノ了
一 西紀洞進〻〻
一 補日史徐〻〻
一 公人朝夕人〻〻
一 中務科学業科〻〻
一 十二月三日大金出す〻

文政四年

一 此年正月六日出立ニ而上京、五月朔日帰着

一 正月廿六日林家より為年賀金弐両之様ニ
御用向見合ノ用向ニ成候節、紀分部一両ニ而
書籍ニ而林家へ壱人ニ而相添候ニ付、此節ニ一両ニ
書籍并文冊数毎ニ為持遣候処、猶又も候而ハ持参
其日為ニ為今明日中持参可致旨差越候処也

内藤耻叟
宮内廳書陵部

正月廿六日

一 金雨之橋石　林又三郎

一 二月朔日林家より金雨之橋ニ
以白紙被仰上候趣、先月及御掛合候節切
紙ニ而見出ニ有之候て可申上、然る処右紙被成候
其節御見出し之分並六冊差出候様ニ物
御座候て先其分計り御出し申候処、以蔵候
御用相済候ハ、御用ニ有之又ハ御返納被下候様存候以上

二月朔日

金雨之橋板　林又三郎

一 二月三日林家より
右暮増孫様ニ而御神代重續之事、其家
筋目之別り候様ニ以之て可申、然ル処
此度御出生ニ付而御届申上候以上

二月三日

金雨之橋石　林又三郎

一二月七日昌平坂学問所ゟ
当月十六日釈奠ニ付　罷出候ニ付当暁七ツ半時
出役御用ニ付相勤候門人共罷出下宿之者
大学頭中出候様ニ而達申候以上
学問所勤番組頭
二月
和学講談所
右之通ニ付
当月十六日釈奠ニ付　罷出候ニ付当暁七ツ

半時出役御用ニ付相勤門人共罷出候相成大学
頭殿ゟ御渡候趣承得其意候則別紙之
通罷出候中ニ付当御附添指上京仕当番中
相勤候段奉差上候以上
二月七日
今田元穏
中神修平様
猪飼彦次郎様
一三月廿九日御城ニ而当月廿日大学頭殿ゟ

公人朝夕人と申役儀以前より勤り候
当時土田孫左衛門右役儀相勤候者ニ而右
孫右衛門先祖
権現様慶長年中
御参内之節出来し装束ニ而御供装束
拵ニ而孫右小用筒懐中致候得共上古形
久年中関東北条家之時代於経京都より
下向之時先祖之者相下り鎌倉ニ住居相勤

家之役人ニ相成諸事ニ於古仕候訳ニ御座候
御参内之節小用筒懐中致供奉仕候
役儀之趣存候右古記之儀御尋ニ付致
承知度存候以上
三月廿九日　大草主膳
清務様
右之書清務披五月中ゟ出役得御意ニ而四月
九日之此林大学頭殿ゟ返答有之候同十日大学頭殿ゟ
い

右自分承ル達ニ成

覚

一羽夕と申候役名ハ被羽将軍武家草創ゟ
相見へ申候尤藤原将軍代之間ハ羽夕
雑色と称し候処京都将軍以来公人羽夕と
申名目相見え申候常ニハ羽夕と計も唱候
故ニ此度候拙羽夕雑色と唱候儀其雑色も
有之ニ付相改候而羽夕雑色と唱雑色と申

者御座候羽夕と称候方ハ羽夕将軍家ニ
営中ニ相勤仕候而雑事奉ニ役と相勤申候
故ニ羽夕雑色と称候儀ニ御座候宝永四年十二月廿八日の
除ニ羽夕祇候雑色と申文有之候又者宣衆雑色
ニ遣羽夕雑色の始ト申候
とも唱へ申候これも宣衆之事ニ候得ハ羽
夕と称候ニ是等ニ候無御座候古代ハ其年限
ら候役者不存候と定リ在ル事ニ候一役ニ付
無程ニ候三拾ニ候唱候事有之御座候羽夕雑色と申

名目ニ東鑑建長二年十二月廿一日条同五年正月二日条
弘長三年八月九日條者沙汰六波羅召捕條ニ見エ
宗親雑色ト申ハ東鑑元久國雑色ト申候ハ村
元年三月廿九日條ニ見エ申候
里ニ在宅仕候而臨時之公用有之候節ニ
仕候而常ニ祗候いたし候者ニ而無之候故ニ雨雑
色ト唱申候由ニ相見エ申候是も上洛ニ召
連られ候者ニ而御座候雨雑色ト申名目ハ東鑑
弘長三年八月九日條ニ見エ
御中間 右の雑色ト申者ニ而身分ニ侍而ニ者
より一際さかり候者ニ而御座候凡諸余給宰家ニ

時代ニ寄公家之内ニも一と侍と申候当時ニ而も
布衣府より出仕の家元
ゆるしニ而当時ニ
も侍格の者ニ而御座候 次ニ雑勤（カリコノサフラヒ）侍と申候而これ
当時ニ而申候ハ随分相応ニ仕候
次ニ中間と申候而これハ苗字無之者ニ而侍と
雑色との間の者ニ而御座候支配ニ中間と称し
侍ニ而ハなく雑色ニ而もつき不申候 当時ニ而も
中間ニ御座候 当時ニ而中間と申候ても随分
舎人 次ニ雑色と申者ニ而御座候此者ハ蔵人大夫

ゟ同格ニ若ニ而苗字無し若ニ御座候所内
朝夕雜色ハ小舎人の上ニ立候て國雜色ニ
小舎人の下ニ立候故ニおゐて申候 雜色も雜色 沢ヨリ候ヘ
苗字を名字ト申候御こ見へ申候ニ而雜色ニ長とも唱
申候 小舎人ハ小舎人童とも申候故ニ童名と唱候
何丸何某等と称申候 当時の御小人ハ当時御当時候ニ而
御座候足利時代迄の御小人ハ皆童名をつき申候也 以
上諸侍下の格式ハ皆難波を本様とし古来記 足利ね
ならひ足利家の旧記ニ之を委しくおゐて
軍の時代ニ御座候而も大概ハ本ニ准拠ニおゐて
申候得共時世移候事故当流ニ与分

猶今時代ニ至りてハ是ニ而相成申候若一
御当流也 御旗本ニ而当時の御当流ニおゐて当候とも
家柄ハ常ニ御当流より大御当流とも御座候
其ニ走流 御旗本ニ当時の御十人御役ニおゐて当候とも
家柄ハ小十人ニ当り候 都而御役ハ小十人
より八格ニ
大ニ若ニ而 是より上ハ今ニ侍あり 其ニ格勤 今
御役の者ニおゐて当候ニ而譜代家の格勤 の
侍の事ニ而是足利家ニても大方格勤と称し 是ヨリ侍ニ准す
若ニ而苗字有り 若也 格勤ニ而ハ苑若ニ而
等氏年中行事ニ書て
し此方ニ而ハ本役ニ而も
称ニ御年中行事ニ有之候 其ニ中間也 是ヨリ苗
字を称させ候ニ而 侍ニてハ無し 若ニ而

御座候（中間といふ事名目ハ蜷川家手筈よりにや）御手小舎人小者（小人とも）
（よう〳〵来の御小人なり）雑色公人也こまりて何事も同様の
者共ニ而苗字無之所ハ勿論ニ御座候（当時御伊勢貞親隠出家に）
（雑色と申ハ中間よりハ下座者よりハ上ゐる者也おとこ永禄四年三好筑前守亭御成記にハ御小者御座者衆とより下ニ公人と列し中山申上れハ公人と申ハ至而出来候の者共ニ御座候）元蜷川家ニて六
小舎人雑色の分職にて有之候と足利家ニ
成候而ハ小舎人の内より小者と呼れ雑色の
内より公人と云事ハ前迄ニ而勤向も四分ニ

相成小舎人雑色よりハ小者公人の方人数多
有之候ニ相見へ申候（以上足利家在之所方合の寛ハ寿禄中中将記成氏年中行事以下足利家の旧記伊勢家の旧記共ニ為数記申候）さ候ハ公人と申ハぬと
雑色より出仕筆前雑色の勤へ相替の
役ハ公人の方の勤向と有之申候哀を以公人
相勤と申役名も出来候即チ蜷川家ニ
相勤雑色ニ有之申候公人と称候子細を
存合ハ様も有之事もり其方家の人有之候と

ことなる唱門師に相当す 当時猿楽師を云人
御家人とも申せしに梅若公人頭分と申 名目ハ近き
御目見えを致すハ
利家の年中恒例記にのせ申候 常にハ太夫
頭分と心得て唱門師にて在候 利手氏之家職
中行事并利家御元服記諸役等書に 職掌の事
御出入の頭分とも頭分とも記し有之候
一 頭分の家役ハ諸役人へ申上る事 散状の
使 散状ハその廻状の事なり 当時 諸国へつかハす
御使方の家役の事とし
さる事 使をも勤む 以上の家役ハ東照年中
是利家の時代に定りたる

平の公人の役等を勤め 檀門様記 又罪人紀問なきと
以下の日記よりうつし申候
の時ハ罪人ともに取扱ひし 其年ハ伺合の月日を召して御相伴
将軍家参内の時ハ行列をもつとめ 東経年中
恒例記等に 其余松明の役 蘇婆之役 諸一所的
セウメイ タイマツ
記年あり
こゝらにも役参内の役をも勤めにて御座候
佐竹古来にも 両家小用前触の事ハ古実あり
当りても 年中恒例記等に将軍家
参内の事ハ記し不申 御立石トテ伏見殿

ノ急ニ石在之其キワニテノ御下輿也御輿
ノ御カトト急ニ御朝夕マイル也とおもへし
雜ニめて寺分ニ無之輿の傍ニ供奉仕候ニ
こと又早氣ニ隙時ニ藥用在ニ候節は御笑候
終え定るに候小用筒なと持候ニ在
前ニ候ニ申小用筒持候ニ草履をも持候
より下り候ニ御様ニ參候ニ御草履をも持候ニて草履木履
ニ役有ニ而足利家ニ丈故ニ侍ニ物也
御供被召候

一旅ニまかりたき役有り候は種々御家の候へは朝
夕雜色の職分無之足利家にても其の例に
まかりて朝夕を持候
御當家にても古へは無之候後に職分
出來候て後も其後八年
東照宮様御在國のうち同十年
台徳院様御參内之御時御供に
三人朝夕供奉仕候へ請猶家康日記ニ

あり候て元和九年
大猷院様御参内之時分御目見に供奉
仕候而元和年頃ゟあらためし御役ゟハ
由緒書頼之納之不相長持数ニあらため
申候様土田氏被係被下御由緒書相并
公家衆中ゟ差上候ハ相違なく御与さ候所候寛永
年中二条行幸之節ゟ行列ニ而公人頭分ハ
つとめ申候仍而寛永行幸記因縁参考なと
あり候て可被下

一諸公事文殿書并御供奉仕候ゟ由緒を以当前ニ
者若衆ハ太政官大外記家役相勤候漆紗無線
装束用仕候ゟ其後御法事之節出仕
之中之頭分ハ白張無垢大帷（カタヒラ）を下并白衣
了烏帽子着鑓を仕候而あらためし当時并ニ
並無下之御座候而其ニ相并あり候所
相者足利殿時代ゟハ中間舎人頭分ニ而候し
様ニ之者也用仕候事并ニ其をさ相

諸事ニてハ無御座候中間の者無と思召し候の
御法相成候ニ付右之節堅武家月番衣紀
一ヶ年無御用のものハ重衣紀ニ在之候
付ケ候無者と召用仕候故ニ當時の大役の
無用ニ相成候人ニ付候請負之者共と違居候
事ニ相見へ申候然共一向左様之事ニては
無之百姓ハ只足利家之例ニ而も時之其
者ハ無用召用仕候役目を相勤候者又朝
夕人ハ種々足利毎相年限をも以一人ニ

てハ無之教人ニ在之候ものニ御座候
御當代ニ相成候而ハ右格別ニ古朝夕の職分ニ在之候
相成候ハ役儀ニ付人々ニ御中間ニ御小人相勤
相方ニ相勤候而も御奉用之時ハ惣て古例
ニ相改メ御行列ニも在之候ものニ候事故是
役人ニてハ右之通ニ候御定所ニ相勤方無之
候ニ付御小用向持ニ相付ル役儀ニ相勤候もの
ニ御座候

一土田氏家傳之儀ハ承久年中出羽前守
下向之砌京都より罷下り候より其職名跡
是迄相續ニ相成候得共兼而前年の時分
出役様相見へ申候處承之次第より先年
之通り縁ニ而御座候喜連川家之先祖代
々差添家督并勤仕入念相勤之處京都
相奉行へ申上候由相立事相調
申上候數度仕候事ニ御座候 喜連川家先祖之親戚ニ成

氏年中行事ヘ相加候之儀ニ付土田氏ニても夫れ
之儀ニ付
らの子孫之内心得之趣を相立候処
其後去年中御座候而相調候得共相勤候
仕候年来御奉公之御用筋相勤候
本家ニ而四代子孫之儀ニ付相勤候

座候以上
　乙　四月
黒

出入相分ケ候ニ付出帰ニ而書面
之儀指控候ニ付而者右処當方ゟ申中ニ付別紙ニ
指控候節勘弁被仰付候ニ付書面并差出シ
案中大沙汰ニ而右之通候ニ付指控
當方申才之沙汰有之候出帰之差定ニ而差出
可申旨御沙汰有之候以上
出帰之者　四月八日　才山平四郎　林家之指示ニ而
筆ノ上済之同十日　御届御差出　候ニ付御指

一　条之事ニ付当月之暮別紙ニ通理候筆ノ宅ゟ
指条使行之趣

覚

一　史料清書料紙手数之儀九十中度ニ去ル八
月中新出来去ル其後御取扱之儀
御座候右之通御届申上候以上

十二月廿四日

橋——

一

覚

一定料取調方出役罷在候板嶋平次郎へ被下金之外
銀子七拾目并出役中被下置候料等為
代當巳秋冬分金銭拾両例年之通遣置
候間御定之通下ヶ被成候様奉存候以上

十二月十六日　播——

一

定料取調御用相勤候日数之儀當巳六月十六日より
十一月廿九日迄百六十三日之内毎月一六之
日並中十二日并暑中休日御休調日数
百十二日之内

御用ニ付出勤日数五十二日之内
出勤五十四日
　不参日
　欠勤卅三日

出役頭取
　板嶋平次郎印

出精八十日
於廿六日
出精百十二日外出精
出精廿九日
於廿三日
出精八十日
於三十二日

出役 松下錦次郎
出役 石井源次郎
出役 金田元楯
出役添役助 中山半四郎

出精百八日
於四日
出精六十日
於五十二日
出精廿三日
於廿九日
出精百四日
於八日

出役 関口雄助
出役 田口小次郎
出役 吉田忠次郎
出役 児玉猪之進

出勤百日
外十二日
出勤九十日
外六十二日
当番勤中之外御用日数四十七日
出勤四十七日此勤
右之通御座候以上
巳
十二月

出役
朝比奈釜太郎

出役
田中保三郎

手付
忠内栄太郎

橋本與惣様

一
花園院御記　三冊
延慶　文保　元亨

後光厳院御記　壱冊

天徳集　弐冊

参資記　壱冊

葉黄記　六冊

大外記清原良賢記　壱冊

花蒂記　三冊

春記　長暦　長久二　永承三　天喜二　拾七冊

右三拾弐冊

十二月十二日東條隼人佐殿へ差出候同廿四日

林忠五郎を以返却被　仰出翌年に成り

一巳十一月林忠五郎殿より御受取

覚

一金弐拾両

一金五拾両

一金百五拾両

〆金弐百弐拾両

内

金拾両

金弐拾五両

此料御用出府路用

此料御用

別御手當

此出物荒草代

此稽料弁

御金庫

来午年迄

取替二両弐分

近年年々御支払

金壱分

金五拾両

金拾五両

金四拾両

金三両

金拾両

右同前御救同心江遣ス

（御貸附方御用借金
年賦上納

（右同前百五拾両之
利足金

但シ年壱割

当七月分
御用金

右四拾両ニ利足金七月分
当月より六ヶ月分

但シ右御預ケ金弐拾両ニ壱両宛

（十月十一日両替ニ而五両充
御用立金之利足

〆金百五拾七両三分銀四匁五分弐厘

是迄分

金六拾弐両弐分銀三匁八厘

此銭三百七拾文

右之通御渡ニ而御座候預ケ手形相渡申候

当組之教長者中より壱両宛ニ而同人様

御役中ニ出ス

巳
十二月

文政五年 目録

二日出 城内行之事

書物並読書上之事

新規上ケ并銀子拝領之事

接待之者并足役人之事

接待之者出入年数之事

内検役人改之事

御内目付役之 御分有借地町屋敷書上之儀

之御断之事

上料宿書郷之事

内貫上願尾料之事

和学所出役之事

御本丸御祈料御紙面之通
西丸御祈禱
宗旨御祈禱
御祈禱料
御祈禱方御祈禱
御金上納
以上十九ヶ条

所司代御祈禱料
水戸殿御祈禱
御簾中御祈禱
之御方御祈禱
御簾中方上納金

文政五年
一正月朔日内藤紀伊守殿被差出候御祈禱料御届
之
秋葉院二日登
城仕候年頭御礼申上候之節御札差上
御礼仕申上候様仰聞候趣申上候以上
正月一日
増上寺方丈役者
同日林家より差向之御用之御届

私領高二百石

被仰付御年限下ヶ山本久之丞并

被仰付置候処御願之趣御免被成候ニ付御達申

上候以上

正月一日

塙――

一 安料請書料寄合寄ニ候得とも

覚

一 美濃紙

三千枚

右安料請書料紙御渡被下候様奉存候

以上

午
正月十日

山田久助殿

塙書物掛り 依山久兵衛

一 調達出来西部とも

安料並丹銀ニて書物表方右井大坂役

写本之ハ御年番ニ被仰付候 ○新御用方

御要之谷表ん出林所持致候ニ付右之候

（朱）寄合被仰付

以申年

四月十四日

清山久米之助殿

四番町

此附候書物ハ出羽ニ於て科村上帝紀家記於持

続群書類従目録之内ニ御座候

内分仕立候旧十二月十二日不残差上申候

群書類従出板仕候巻数之儀先年目論見

一　群書類従出板仕候巻数之儀先年目論見

出板仕候前後百冊餘ニ可相成与申上候[illegible]

当時迄御印形仕候部数合六百六十五冊ニ

相成申候右板ニ而摺立候而御用之儀

上金として新金三拾両宛被下置候処

此節金子ニ而上納仕候而ハ不相済候間御払之

義ハ不足之分ハ何年ニ而も取立候様[illegible]

右之通不足之分御下ケ金相成候様奉願候

以上

午　四月廿六日

塙次郎

右之通去ル御懇望廿八日被仰渡候處御請申上
御同人分御用掛り林升作殿ゟ去ル一昨年より御預
許様之上五月十六日御金相渡候儀ニ付候得共
郡之御座候右之段申上候以上
右之件を披露郡之御座候ニ付条様御用所
三月中役之五月廿日林録事殿御届
被仰渡候条御承知
一 六月十四日林録ゟ

相達候旨ニ候ニ付明十五日九ツ時拙宅ニ
可被御越候以上
六月十四日　林又三郎
　　　　　　林大学頭
塙検校殿
招以広言不可御独ニ付為名代次郎罷出
其出先麻上下ニ而罷出可申旨御同人以上
六月十五日次郎麻上下着用林家へ罷出

右之通御達

銀三拾枚　　塙検校
　　　　　　名代
　　　　　　　次郎

編集いたし候群書類従全部出来上候旨
御届申上候ニ付
[illegible]
六月十五日

一（朱：長）
七月三日諸目録出来紙面和学講談所掛
兼林家ニ山田之助方へ　（朱：右御翻刻調出来之上[illegible]）
秋成去巳年八月中瘧疾相煩其後労役
之痛ト成其上持病之積気差加り久々相悩
候ニ付医療仕候得共老年之儀ニ付不相癒
追日衰弱食相減候ニ付精気之衰老専
存候年来奉業
御厚恩和学御用向相勤冥加至極難有仕合

奉存候、若養子不相叶相果候ハヽ、跡式之儀
譲請不相續被仰付引續和学御用相勤
候様被成下候ハヽ、雖有仕合可奉存候、何卒右
之願之通、若年寄方へ御願被下候様
偏奉願上候、以上

文政五壬午年七月六日　塙総検校（印）

林大学頭殿
林又三郎殿

一　七月七日林家より

其許御用筆墨料・紙料共金九十両ニ付
明八日於[illegible]四ッ時御渡方役人へ例之通受
取候様可被致候、尤宅ニ而不心得無之様可被申達候
以上

七月七日

塙総検校

林大学頭

一八 七月九日右之通御届書梅霖ゟ使ニ而差出ス
梅霖 右同断山田久助殿へ差出ス

御届書
父橋義無據御役被仰付候處去巳八月中ゟ病氣之處
養生不相叶今九日卯ノ刻病死仕候
此段申上候以上
年
七月九日
橋次郎

忌服御届書
橋次郎

父橋義無據病氣今九日卯刻病死仕
忌五十日 七月九日ゟ 八月廿九日迄
服十三月 七月九日ゟ 來未七月迄
右之通忌服請申上候以上
年
七月九日
橋次郎

一九 九月二日先年ゟ御年賀出府之節梅林寺ゟ
御届之通御聞届被下之由ニ而

塙前惣検校
年七拾六歳

塙次郎
年拾八歳

廿
一 九月廿六日林家より左之通蕃織部集
御用之儀候間明八日五半時我等宅江可
罷出候以上
九月廿六日
林又三郎

塙次郎殿

林大学頭

袖書
猶以麻布山下ニて可申聞候以上

一 九月廿八日麻布山下御用林家ニ而承知左之通
被仰渡

塙検校子
塙次郎

塙惣検校事年来和学心懸御用出精相勤

御目付次郎右衛門殿人様物書下役
添御用所引続ニ相勤候ニ付拝借地町
屋敷共其侭ニ被成下候
右物書役之儀ハ新規御役ニ付申渡候
一 九月十八日以下西丸表通ニ而諸番所御手前ニ而一通り
出之文以当ニ御用番ニ而故暮之
御自分金之事
一 文化四卯年十二月廿二日御達
塙検校

史料并武家名目之書試仕立之事塙検校
江被仰付候御用ニ下され御附属被成候御用御
間先達而御手当金被下候
御目見以上之事 塙検校書籍被下置候
検校方へ被仰付候ニ付申渡候
一 同五辰年六月十七日御達
塙検校
史料之義御下知候ニ付御用中御手当

尚又七年之金子相渡可申候

右之通稽古所取建候ニ付申渡候

別段手当金之事

一同八未年御達

覚之月日和学所 其後ニ相成候 但四月七日 [illegible] 翌年ニ相成候

塙検校

和学所別段手当として未申年より

十ケ年之間学問所書籍調御用御貸

渡利金之内より百両相渡完年々差下し

右稽古所取建ニ付御達候事

出役并手伝料引当之事

一同十二亥年三月九日出候書面

覚

史料編方出役七人へ稽古所へ長崎（?）より近く御渡

取調八[illegible]残六人へ手伝料差下候

差下草案代

以上

亥三月九日

塙検校

一同年十月廿一日稽古所取建ニ付差出候書面

以上

林大学頭

筑後守殿

亥
十月

一同年十二月二日筑後守殿御渡之御書面

[illegible]

一寛政七卯年九月六日寺社奉行青山下野守殿ゟ之御渡ニ而御書付

堀 [illegible]

右之通之御返答以上

午九月

堀 次郎

一十四

九月廿五日水戸様御家老御出会御政務之儀ニ付御届

遠山 書面

塙次郎

公務被致病死仕候処存生之内出精御用
出精相勤候ニ付一段之事ニ為御手当五人扶持
被下置候也

但御扶持方之内弐人分暫之内御借置候

付札

若年寄分 川口秋九郎ニ

右者文政五年九月廿五日大廊下ニ而若年寄列座通りニ
於て御申御達候事

一 九月廿九日広敷添番弐拾人出之林家へ山田久助
来ル十二月限添番勤書差出候
出入候ニ付右之別ニ相有之

料紙美濃紙四つ切(?)

一 拝借地　表六番町　坪数八百六拾四坪余 右者父和学講談所(?)寛政五丑年五月廿三日裏六番町小泉新六郎 上ヶ地之内ニ而弐百坪拝借仕、其後文化二丑年正月 十六日御用ニ付右上ヶ地右表六番町小林権之丞上ヶ地八百四拾 坪余拝借仕、其後同十二亥年十二月廿八日同所東之方ニ而右地 弐拾四坪拝借仕候、都合八百六拾四坪ニ相成申候、文政五 午年七月九日父病死仕、同年九月八日引続拝借仕候 右之通ニ御座候 塙次郎

一 拝借地　北品川御殿山下　坪数六拾坪余
右者父安兵衛拝借寛政十午年五月廿三日西村本能地拝借被仰付文政五午年七月九日父死去仕同年九月八日引続拝借被仰付候
信次郎

一 宗門改九月林家ぇ出ス
宗門改一札之事
料紙白紙村上包之の
信次郎
姉壱人
方壱人
右天台宗ニ而四谷安楽寺旦那ニ
而御座候且又右住居侍弐人中間壱人下女弐人
宗門相改銘々寺請文取置申候以
御座候
文政五壬午年九月
信次郎（印）判

一 十月七日林家ゟ御達
信次郎江

右御用透之節和学所御用相勤折々見廻り
候様被仰付　候ニ付写取見意頼為筆次郎始
出役之上も可申旨申遣置候

奥儒者
成瀬邦之助

十月

一 十月廿八日
御扶持方御證文林村證河為被下候ニ付
林家ニ而山田久助渡ス

覚

三人扶持

林大学頭支配
橋次郎

右者書面之扶持方当年九月分より被下候ニ付
右之間渡引替与而渡之学所以書判手
形ヲ以可被相渡候以上

文政五年
九月

玄蕃 殿下
周防 口
摂津 口

河内 ハ
駿河 ロ
安井半十郎殿
服部孫右衛門殿

一 御右筆文十月廿日安井半十郎殿へ以手紙
来ル廿九日同月廿九日林家江被召出候其
節之通出
御右筆文此方安井半十郎殿へ御達之節
請取書一通差遣し候尤此節林家へ御渡
手紙にて上
十月廿九日
服部殿
安井半十郎
同孫右衛門
右之通林家江御右筆文本丸御用番
一且例月御右筆文御渡之段御下知御手紙之
御細之儀ニ御座候以上
一 十二月六日林家合被為聞年安井之御達之通
覚

銅吹所御用始正月十五日より當御用納十二
月十六日迄ニ相定候事
一 月々出役勤候者四季出役ニて無滞相勤
一 出役人数段々沿革有之候得共只今迄右之
取計之定数と申もなし尤
御目見以上以下ニ拘り候者数凡十人ニ
限り可申事
但し出役之儀ハ手限ニ而申付候ニ付諸事致

分出役之儀ハ忠内算者抔ハ負勢ニ付出役之一人
迄有之候得共此後一人減し候ニ付其
補入有之間敷事
一
覚
先達而より武家名目料之儀ハ右ニ付當銅座
拝申渡之処諸事之儀合候段今より
史料方ゟ前々之取調相揃可申段事

坂倉半次郎

一 右小普請より出役ニ而是迄當銀并ニ拾枚ツヽ被下候処此度御矢奉相成候後御番之ニ出精候事ニ被成候ニ付當銀七枚下候事ニ相成候處不足八拾ヶ方塗師被成候ニ付當年より七枚ニ増ニ被成渡候事

中山平四郎

右頭取心得候ニ付七月十二月金弐百疋ツヽ被下候處此度洞より一年分金三百疋ツヽ可相渡事

児山猪之進

右之者出役定数外ニ付而渡物減候ニ當役洞より並之通可相渡事

忠内茶次郎

右是迄之通り

一 松下勝次郎・西井原次郎 金両元締三人
此度掛役勤候ニ付当暮羽織代是迄之通り
当暮調之銀三枚ツヽ来年ゟ毎暮銀
五枚ツヽ可相渡事

一 十二月十九日内検料 林與兵衛書付之通
之書付之通

覚

一 銀拾枚
　此金六両三分銀弐匁弐厘
　　　頼島平次郎
　　　　内手当

一 銀九枚
　此金六両ト銀四匁五分弐厘
　　　御目見以上
　　　出役三人
　　　　内手当

一 金三分
　　　中山平四郎
　　　　手当

一 金九両壱分弐朱
　銀五匁弐分八厘
　　　御目見以下
　　　出役七人
　　　　内検料

一金三分弐朱ト
　銀弐匁四分壱厘
　　　　　　　　　忠内篤右衛門
　　　　　　　　　　内縫料

一金壱分弐朱ト
　銀三匁七分壱厘
　　　　　　　　　御目見以上
　　　　　　　　　出役三人
　　　　　　　　　　草履料

一金三分弐朱ト
　銀四匁弐分七厘
　　　　　　　　　御目見以下
　　　　　　　　　出役七人
　　　　　　　　　　草履料

一銀五匁四分九厘
　　　　　　　　　忠内篤右衛門
　　　　　　　　　　草履料

右之通御渡被下候様奉存候以上
　十二月十九日
　　　　　　　　　塙次郎

一十二月　日御勘定所江差出候書面左之通

私儀父検校病死仕候ニ付和学講談所御用向引続
之儀ニ付以前之通御役所并御備金御預り之儀
此段下ケ金之儀早速之通御渡之通被下度奉存候
奉願候以上
　十二月　日
　　　　　　　　林大学頭支配
　　　　　　　　　塙次郎

御貸附方
御役所
一 十二月　日御貸附役所江上納金拾両[illegible]申し
当丑出[illegible]
覚
残元金[illegible]両
一 元金[illegible]拾両
一 利金拾両

右者[illegible]文[illegible]拝借元金弐百両年賦当
年年分書面之通上納仕候以上
午十二月
林[illegible]
清[illegible]一郎
御貸附方
御役所
一 十二月　日御金[illegible]上納金納[illegible]文[illegible]弐通弐[illegible]
右当年[illegible]出[illegible] [illegible]
上納申[illegible]之事

金拾弐両弐分弐朱　　　清蔵包

右者去ル文拾様國史律令様並開板ニ付寛政
十一未年金弐百両拝借仕酉ゟ年延
十年賦ニ延開板年賦元賣捌方相済候ニ付
残り之上酉より五ヶ年延置より十年賦ニ積り
寅卯辰三ヶ年上納相済残金百七拾五両
拾文残り之上去ル巳より当年迄十四ヶ年賦
之積り当年年々上納中処御願件

文政五午年十二月日　　　清次郎　印

堀内山蔵殿
中山与五郎殿
竹本八之庸殿
吉田正助殿
石井源右衛門殿
西　新右衛門殿
馬場藤右衛門殿

右之通相違無御座候以上

林大学頭

文政六年目録

水戸殿え出精御用之事
調進之節之事
田中伊三郎之事
七月御扶持料之事
宗旨証文之事
水戸殿え被遣御手当料之事
御用部屋勘定役之事
二月被算之事
田口出雲之事
出役前後書経冊之事
八月被算之事
出役前日限経冊之事
十二月御扶持料之事
御扶持料出張出

文政六年
一正月廿日林家江伺書
一 奉伺候覚
去十六日坂戸殿役人より御用之紙中来
以同役人宅迄罷出候処別紙目録之書籍
御借用ニ被成度旨達而被仰候ニ付格別之秘
書ニ候得共無拠相渡し且外ニも有之候ニ付御用之
下中ニも奉存候得共尚御用調不和ニ為日用

以上

之品ニ付御渡候間出役所ニ而御請仕候處
当用之品者不足之趣申通し此上之御用
立兼之引替ニ相成候ニ付格別之義を以て
御取計申聞候与申事ニ御座候此段御心得
之為御懸合候以上

正月廿日

橋沢 郎

正月廿一日右御書面之趣拙様家合達書
此者御受之御用書大学頭又三郎

去戌年御申付候上ハ御調被仰之義を承知被成格
御受被下度尚又御備等有之御座候間為
別紙返事得は候可被下度奉存候申付候

以上

正月廿一日

橋沢八様

高村吉郎
前原小右衛門
吉田三郎右衛門
山田久郎

一二月六日昌平坂学問所ゟ

當月十八日釈奠ニ付　御出ニ付當院七ツ時

右段御用可相勤候門人共罷出可有之候

依之申達候以上

二月六日

学問所勤番

和学講談所

右返事

當月十八日釈奠ニ付　御出ニ付當院七ツ

時右段御用相勤候門人共罷出候様可申達候

承段承知仕候以上

二月七日　塙次郎

学問所御勤番中

一三月十二日林家家来ゟ左之通

未調候家記事

寛政十一未年以目録奉伺候貮百貮拾余部

若

ニ而御文庫ニ有之其他百六拾部程返納

進之者如左

○時房卿記（建内記） 行 千枚 廿三冊

言継卿記 草 万三千枚 二冊

宗能卿記 行 五千枚 二冊

親綱卿記 真 五千枚 一冊

宣秀卿記 行 四千枚 二冊

○外記重憲記 真 二万二千三枚 六冊

○蜷川親元記 真 三万六千枚 草 五万五千五百枚 十四冊

寛正二六・文明九至十七

院中番衆所日記 草 万八千枚 一冊

真 六万三千三枚

草料 三百五拾匁四分八厘

行 万九千枚

— 三百八拾五匁五分

草 六万六千五百枚

— 弐百四拾九匁弐分

〆 九百七拾八匁三分八厘

道之部紙数之分

○時房公記（建内記） 行 千枚　廿三冊

言継卿記 草 百三千枚　二冊

宗能卿記 行 五千枚　二冊

一冊

二冊

京極黄門 師守記 壬本
中原康富記 壬本
此外本あり調進之冊

○小槻記 重憲記 二百二千三枚　六冊

○蜷川親元記（寛正六二六 文明九五十七） 真三百六千枚 草五百五千枚　十四冊

院中寄張所日記 草 百八千枚　一冊

真六百二千三枚

草料三百五千枚四百四拾八匁

行千九千枚

一二百四拾五匁五分

草六百五千枚

一弐百四拾四匁五分卸下

メ九百廿四拾八匁五分八厘

此ニ割賦
弐百九拾三匁四分五厘四毛
三ノ紙 弐千八百八十枚
七拾八匁
墨付 弐千六百三十九枚
百四匁五分
表紙仕立 五十一冊
三拾匁六分

〆三〆八百八拾四匁弐分三厘四毛
金三拾壱両壱分弐朱
銀壱匁七分三厘四毛

同前之内
信嗣公記
実旅公記 一冊
公永卿記
家通公記 一冊

言経卿記
忠長卿記
楽人多忠備記
三条家之司靈秀記
東寺書寫本之記　一冊
此外一覧年目録之上ニ遣有網ニ而肴分
江戸表ニ冊数ニ而八冊八合巻ニ
住ニ遣理ニ相成ニ在之候ハ従候一の□

文化二丑年十七郎同三寅年ニ相済郎
ハ郎ニしニ度ニ綱進之通半分
去年御断ニ候ニ而存ニ付之ニ付有御
よりも書物寫鑒定候而相叶し
以上
未三月　　　　次郎
一 五月廿二日持参ニ而ハ云
覚

三番清役所記録掛
史料引受之三御用出役
関口小右衛門

右小右衛門儀史料取調御用出役申付置
候処去九日御用見込之義
御自分唯今ヨリ常出役過人差免人者
小右衛門深存候者定人数様人ニ致減中候
依之此段申上候以上

五月廿二日

塙　次郎

一六月三日以板倉甲斐守殿林家ニ而御書付渡候通

板倉甲斐守
中山備中守

願書

右之紀
松平但馬守殿ニ而
新五左衛門
和学所書物御用出役
田中伴三郎

記

右新以覚

私儀田中新之丞清之者和三年文化

十二子年正月廿一日於于浦和学所書物
御用出役之節 御付人相勤候ニ付
書付ニ而御渡相成候ニ付在処ニ而西丸下小
性組大久保筑後守組安藤殿家来薬
地東京養子ニ内済相整候ニ付出役
御免之儀ニ付相願候様仕候ニ付以上

百人組
松平組馬与力
新番御用番
田中伊三郎 印 判

文政六未年六月

林大学頭殿
林又三郎殿

同日右之書付ニ而[illegible]出候

覚

百人組
大久保[illegible]組与力
新番御用番
田中伊三郎

右伊三郎儀明今迄和学所書物御用相勤
私共[illegible]在処今般西丸下小性組大久保

本多中組安藤飛騨守殿蕃地東京表
子之内儀相談ニ付別紙之通出役漕免候
致候当人数之通ニ　御許之事出役候
致候以上

六月

堀　治郎
顧島平治郎
中山平伊郎

一六月十一日林家ゟ数寄平治郎ゟ申遣し
書付

一六月十二日林家出役之出役之御書付
右取之通書物御用出役申之出役申渡候
右之人数之儀可申致候

林大学頭殿江
林又三郎

右人組之内
松平但馬守組与力
新見某承付
田中伊三郎

御目見以上打掛
御先手佐藤伊豆守組
与力
加藤為平次郎

宿所四ツ谷表大番町
御目見以上打掛
表火之番
生徒
松下歌次郎

宿所麻布一本松白銀台森
御金奉行
組頭
日
西井源次郎

宿所市ヶ谷本村安藤対馬守新道坂上
小普請
御徒目付
日
金田左橋

宿所市ヶ谷月桂寺前
小十人
組頭
中山半四郎

宿所本所柳島町
富田

先役　窪田旗馳

宿所市谷門之橋通り内藤町

小出播磨組
若林伊賀守手附
同　吉田忠三郎

宿所牛込土富町

立花出雲守組付
同　児山鐘之進

宿所目白臺

一六月廿二日林家ニ出入之者召捕候条
去年十二月朔日分当未六月十五日迄之内
定式給毎月一六之日十二月十七日分正月
十四日迄并暑中満日之休日外日々出精仕

宿所牛込山伏町

小普請組
青山左京組支配
兵之助倅
羽川金太郎

御用書物調日数百廿九日之処

勤日数百六日

御目見以上
出役

松下欽次郎

勤日数百廿九日

西村源次郎

勤日数八十日

金田元橋

外ニ御手当銀之外筆墨料一日銀三分

是迄之通之積を以被下候

右三人

延日数三百拾五日

此筆墨料銀三拾四匁六分五厘

但筆墨之儀ハ三日ニ而壱分宛是迄者百日ニ壱分宛被下候

御目見以下
出役御徒

中山平四郎

右御徒勤相勤候年割ニ七月十二日合ニ

是迄之通ニ被下候

勤日数百廿三日

出役

實口梯蔵

勤日数三十一日　吉田忠三郎

勤日数六十五日　児山猪之進

勤日数百日　朝比奈参三郎

勤日数四十八日　五月八日ゟ出役御番入　田口小右衛門

勤日数九十三日　六月十日ゟ出役十日振通　出役御免　田中伴三郎

勤日数四十六日　六月十日ゟ八月御十八日　武部小六郎ゟ御番入　忠内幸太郎

右八人

延日数五百九十七日

此筆墨料銀六百五拾六匁七分

但一日ニ銀壱匁壱分宛下ケ

都合七百五拾六匁弐厘

外ニ金三両

右当七月六日迄之筆墨料内払料書面之

通御座候以上

未六月

橋次郎
松前平次郎
中山平四郎

此半分日向守御出包之分
右之通ニ書付又七月廿日林家ニ出ス

一 七月八日御祓料林家ゟ御渡之節　其節御渡之
出之分之内壱封

覚

一 銀百弐拾九匁
此金弐両弐分弐朱卜
銭六百六拾弐文
松前平次郎ニ
新本所御用番

一 金三分
中山平四郎ニ
新本所御用番

一 銀六百廿弐匁五分
此金壱両弐分卜
銭六百三拾七文
御月番本所上野ニ
新本所御祭料

一銀弐拾五枚被下置候　御目見以上出役ニ
此度被下　三拾俵以下御料
御褒美被下候文
右之通被仰渡候ニ付以上
未七月八日　　橋本伊勢守
一八月六日昌平坂学問所ゟ達
当月十一日親類共　御出役并当御附
支配御用ニ付相勤候ハヽ人ゟ可申出候

信之申達候以上
八月二日　　学問所御当番
和学講談所
一十月十七日宗右衛門文之出候ニ付例之去巳之九月ニ相成り右同事ニ御用之文之事
一十月十七日出役之者限経冊之類相勤候ニ
進呈也、給限経冊之別紙ニアリ
一十月水野組安御用之出候

覚

一 三匁 指渡史館清書文之 御申付日本史用
紙ニ付 御取極方之上 当分(?)[illegible]
之 此上物 願候ニ付 雑有之候処 大ニ付
御書損候も 編集仕候ニ付 為写料紙代
料計 指紙遣候 指支 御座候ニ付 指構
取除 申度候之 御書付以 又ハ新規ニ相改
候ニ付 [illegible] 有之仕合ニ存候処 [illegible]

紙御分遣し 指支御紙下ケ置候処 指構
生之内 相書損紙 并御懸ケ 上京仕兼候書
損紙 仕立候ニ付 為 [illegible] 遣候も 御座
候ニ付 [illegible] 指支 只今之 御座候 [illegible]
出来 [illegible]
清書紙 分ハ別ニ 書之 [illegible]
[illegible] 御 [illegible]
通り 御渡し 残半当 [illegible] 指下 [illegible] 処

御上京迄 冥加之儀何程宜敷
被仰付候様 此段御願申上候
私共迄相続仕来候処 御伝(?)
之内弐百文御願申上候 恐入奉存候
以相続仕度奉願上候以上

文政六年未十月　　清治郎

青山量助様

一 十二月林家より被仰渡 冥加料頂戴 御料書面

覚

銀拾枚
銀拾枚内
銀七枚
外六枚之 十一月 弐分 中へ
銀五枚
勘日数百四日
銀五枚
勘日数六十二日

役人
諏訪荘兵衛
同
飯島平治郎
出役
西井源治郎
同
金田玄橋

松浦治部之儀二人ニて御勤被成候ニ付筆
墨料一日ニ銀壱匁ニ厘宛被下候
右毎人延日数百六十六日
此筆墨料銀拾匁四分三厘
但筆墨料銀壱匁
筆墨被下日数百日筆墨被下
右日之分
松浦治部
中山兼四郎
勤日数四十七日
右諸役御勘定所ニ而別ニ十月十二月金三両宛

ゟ六月迄
勤日数九十五日
惣御役人御用御用ニ付平四郎江七月
十二月金三両宛被下候
月
関口頼助
出役
月
吉田忠三郎
勤日数七十七日
月
児山猪之進
勤日数百四日
月
小林儀右衛門
勤日数百五十七日
月
細谷参右衛門
勤日数九十日

右平御目見以下六人
延日数五百六十日
此筆墨料百拾八匁弐分
但筆墨料日割
此扶持料五石六斗弐升
但一日ニ付壱人ニ付五合宛
都合銀弐拾七貫六百五拾八匁五分六厘
外ニ金三百疋

雑用とも金三百疋宛〇〇〇〇外金
三百疋弐分ニ相成申候

右高十二月より十月迄高銀并筆墨料
扶持料共書面之通御座候以上
未十二月
橋次郎

覚

未六月十六日ゟ
同十月廿六日迄
都日数四十六日

元和年中〇〇役
田安奥詰
松下新次郎

右ハ御印毎年銀子拾枚并ニ草墨料
一日ニ銀壱分弐リツヽ之積りニ而年始
程近十月八日田安奥様ヘ御目付山本
別紙之通申上ル

未十二月　　塙次郎

一十二月日御用番ゟ方角御用紙半紙ニ而半紙大
家之儀ニ付ニ入用之出候草稿料ニアリ
一十二月御指料ゟ拝借金之儀之御書付

史料編輯御出役中御手当并御稽料
草墨料之御渡出
但御使御方御役所ゟ
金三両ニ付六百文ニ而銀三分三リ余之

一銀拾枚
此目方四百三拾目
此金六両弐分銀五匁弐分
西丸奥御用掛金四両之積り一ヶ年銀五枚
永五百文

一金三両弐分

内藤九郎助ニ預　内壱人廿七日十二月金二両壱歩也
宛ニ而御当番三分
一銀五百七拾六匁四分
此金八両二分銀四匁壱分六厘三毛　但右場所同断
内四人之分ハ下内出役宛六人内稼科六月十六日分
十一月晦日迄之内無延日数五百六十四日
分一日二人ニ付銀二分宛ニ而積り
一銀拾八貫目六厘　但右場所同断

此金二分銀二匁九分七厘
西丹後金兵衛草履科六月十六日分十一月
晦日迄之内延り日数百六十六日分草履代
一日銀二分宛ニ而積り
一銀三貫七匁六分四厘　但右場所同断
此金二両三歩銀四匁五厘
内四人分ハ下内出役宛六人草履科同断
〆金拾八両銀四匁四分二厘

右之通り御座候以上

未 十二月

文政七年

春釈奠ノ事

家記調進ノ事

女門葬送入用事

秋釈奠ノ事

布衣ゟ地色同紺羽織是ゟ御免被仰付候

冬溜り手当ゟ給料出る事

御用挑灯事

自作勤筆事

七月ゟ月当出給料ノ事

組合人高割ノ事

文政七年

一 二月四日昌平坂学問所ゟ
当月十六日釈奠ニ付御出被成候ニ付当暁七ツ時
衣紋御用ニ付相勤申候門人召連罷出候様申来
候ニ付申遣候以上

二月四日　学問所御用番

和学講談所

一 二月廿四日榛村殿御渡ニ而段々承候所林大学頭

今般諸家古書物類御相達有之付

覚

先達而和学家和出来事ニ付御用書物ニ附而

挑打之事ニ而申ニ付向後和学家御用を

調候挑打相用申候ニ付右出来事之上ニ而候り

可申候ニ付御用ニ御問合之事

一二月廿日林家ゟ当戌一ヶ年分書付

可調進一家記事

寛政十一未年ゟ寛政八内未調進分

〃時房公記（建内記） 行 千枚程 廿三冊

〃言継卿記 草 百六十枚程 二冊

〃宗能卿記 行 五百十枚程 二冊

〃親綱卿記 真 五百十枚程 三冊

〃宣秀卿記 行 四百十枚程 弐冊

〃少外記重憲記 真 二百二十三枚 六冊

〃蜷川親元記 真 三百六十枚程 草 五百五十枚程 十四冊

殿下議諸家古典之類ニ付相達有之付

覚

先達而和学家ニ而出来候事ニ付御用書物ニ附而
挑灯之事ニ而申出候而後和学家ニ而御用ニ付
調而挑灯相用申而相出候事ニ付候ニ而被成
下候ニ付用申聞候事

一 二月廿日林家学問所へ出候而書付

可調進一家記事

寛政十一未年当家ニ而内未調進分

〃騎房公記 建内記 行 千枚程 廿三冊

京極宮白師[illegible]記 壱冊 七丁
中原職忠記 壱冊 四枚
右相済アリ調進之候

[illegible] 程 二冊

[illegible] 程 二冊

〃親[illegible] 行 五千枚程 壱冊

〃宣秀卿記 行 四千枚程 弐冊

〃少外記重憲記 真 二百二十三枚 六冊

〃蜷川親元記 真 三百六十枚 / 五百五十枚程 十四冊

〃院中當所和日記　百千枚程　一冊

右之通ニ御座候所、ニ御文庫ニ余り御座候中ニも御調

進仕候様ニ相成候様存候

〃兼仲卿記（勘仲記）廿巻冊　自建治元至永仁二　三千八百枚程

〃蜷川親俊日記三巻冊　天文七八十一　第二六百枚程

〃拜賀著陣ア類八巻冊　自寛治六至弘治四　真二百八十枚

〃東寺執行日記廿巻冊　自元徳二至元亀四　三ツ第六百枚程

〃祇園執行日記六巻冊　康永二貞和六正平七貞治四応安四五　第五百枚程

右之通ニ御座候是者寛政十一未年御覧被為入

候ニ付御調進ニ相成候家記古類千部御座候

尤其節より本家ニ有之候本ニ而御座候以

家之記録其外書籍全而御座候より不残本家心得

御座候而も不残本家ニ而家記類ハ続候

正家記録仕候而も本家と下物ニ大方共

被下候ニ付候節ハ御同前之事

是迄仕来り候ニ付其他之儀ハ御先例之通ニ而仲

附記様ニ合部右之事候ニ而存候ニ調進之家
記ニ八行十八字ニ相定おゐて始り丁数
多相成候冊ニ而　右当座被仰付候ニ存候以上

二月　塙次郎

一
三月九日諏訪庄右衛門殿へ林家より御達

小貫弥太郎

内田多陳和学所御掛り之節史記用ニ付
和学所和学方史料之調之自縛ニ付御納所

旨調不相済候ニ付申出候趣御候得可調方之儀
済候ニ付可被申渡候事
此方御掛得心ニ而申上置御達申候事

石川播之進

内田多陳和学所御掛り之節和学所和学方史
料不相調之自縛ニ付相納所旨調不相済候ニ付
申出候趣御候得可調方之儀済候ニ付可被申
渡候事

其外撰得テ被仰　中上童御遣有之事

生田左三郎

新山藤五郎

其外庭助等之傳達者方へ非蔵人持帰

次第下向之事

一五月廿四日林家より御辞し而（女御）

女御入　内薨去之後更ニ女御入　内無之候

例

一薨逝之　女御ノ儀　皇后　宣下有之候

例ハ

一五月廿七日右御辞退　林家執奏ヲ以被

仰渡ノ

女御薨去之後更女御入内之例

藤原殿以来此例不見候　女御より

中宮冊立之後更女御入内之例ハ是

相見ヘ不申候

後堀川院

中宮藤有子 貞應元年十二月入内同二年
二月立為中宮嘉禄二年七月廿九日為皇
后宮依女御入内記 長子 一代要記
是長子女御とありて頓て中宮に立られし
むかへまつる中宮職を明らかなり
中宮藤長子 嘉禄二年六月十九日入内七月
廿日為中宮 同上

中宮藤禧子 寛喜元年十一月十六日入内同
二年二月日立后 同上
嘉禄二年長子中宮に立て後寛喜元年に
至て三年也此間女御為し

亀山院

京極院 藤佶子 文應元年十二月廿五日為女
御弘長元年二月八日為中宮 八月廿日為
皇后宮 女院小伝

〆今出川院 藤佶子 弘長元年六月廿日為女御
八月廿日為中宮 同上
新陽明門院 藤位子 文永十二年二月廿二日
為女御 同上
新陽明門院の入内ハ亀山院御譲位の後
の事也
後醍醐院
後京極院 禧子 文保二年七月廿八日為女御
元應元年八月七日為中宮元弘二年八月廿日
為尼 女院小侍
帝隠岐に遷らせ給ひし故に薙髪有しなり
新室町院 珣子 應長元年六月十五日為内親
王元弘三年十二月七日冊中宮 同上
是重祚の後也
女御藤栄子元弘二年十二月廿八日女御 歴代皇紀

右女御中宮に冊立ㇾ後更に女御入内ㇾ例あり

女御贈后ㇾ例

中和門院女御

藤原尚子 号新中和門院 桜町院御母

近衛前摂政太政大臣家熙公女

近代紹運録云正徳五年月日女御定給享保元年十一月十三日入内同五年正月廿日宣下同日薨十九歳同廿三日門跡定同十三年六月廿六日贈皇后 女院部類にも見えす但贈皇后を贈皇太后字に作る論下にあり

公卿補任云享保十三年六月廿六日贈皇太后宮宣下 新中和門院

按享保十三年は中和門院御在位中にて桜町院は東宮にて在ましし時当帝の女御なれは皇后を贈らるへき所なれとも公卿

補任女院部類に贈皇太后と記せしは當時
別勅ありて定められしにや又は傳寫の誤
なるもはかりかたし

附記

土御門院宮人

源通子 後嵯峨院御母

宰相左中将贈左大臣通宗女

一代要記云典侍源通子贈皇太后

百錬抄云仁治三年七月十一日母儀源氏贈皇后

按此年三月後嵯峨帝即位ありしによりて
后位を贈られしなり

後土御門院宮人

源朝子 後柏原院御母

権大納言贈内大臣政賢女

女院部類云明應三年七月十九日從三位同

廿日准三宮同日薨元亀四年七月十八日贈皇
太后宮

按文亀四年は即永正元年なり後柏原院
御即位あり、第四年に當れり

後奈良院宮人
藤原栄子 正親町院御母 号吉徳門院
萬里小路宰相賢房女
女院部類云永禄元年九月廿六日贈皇太
后宮

按永禄元年ハ正親町院践祚の翌年なり

右通子以下は女御ハあらされとも當帝の
御母儀なるか故ニ后位を贈られたるなり

右御尋ニ付舊記等捜索仕候処大概書面之
通御座候以上

申五月

塙次郎

一七月三日林家ゟ出候病料等書付

覚

拾枚之内
銀六枚

未十二月中六月迄
勤日数百廿三日

御目見以上
出役頭取
日出役
須鴻平次郎

同 百十六日
西井源次郎
金田元橋

右両人延日数弐百三十九日

此割合料銀弐枚六分弐分九厘

但 壱日壱分六分壱厘三日壱匁
壱日壱分壱三 百日壱匁

同 百八日
御目見以下
出役頭取助
中山平四郎

右頭取助相勤候ニ付七月十二月外金三両ツヽ被下候

同 百四十一日
出役
吉田忠三郎

同 百廿四日
栩坂釜右衛門

同 百四十日
児山猪之進

同 百廿七日
小野儀右衛門

同 百三十七日
菊地五郎右衛

中山平四郎以下六人

延日数七百七十七日
此筆墨料銀八拾五匁四分七厘
但右同断
此賄料銀八百五拾四匁七分
但一日銀壱匁壱分

中三月ゟ六月迄
勤月数四ヶ月

同役
小貫源太郎

同
石川織之進

右弐人

延月数八ヶ月
此筆墨料銀三拾八匁弐分
但壱ヶ月
筆弐對料四匁弐分五厘
墨三挺料五匁弐分五毛

助筆
生田長三郎

楷書四拾丁
真片仮名百三拾三丁
草仮字百八拾五丁
楷書弐拾壱丁
真片仮名百六拾四丁
草仮名七拾四丁
右弐人分
新山蔵次郎

摺書六拾壱丁

此筆墨料銀九匁壱分五厘　但壱丁ニ付壱分五厘ツヽ

壱万仮名三百四拾壱字　但壱丁ニ付壱分ツヽ

此筆墨料銀六拾四匁壱分

従仮名百五拾九字　但壱字ニ付八厘ツヽ

此筆墨料銀弐拾九匁七分四厘

都合銀六拾卜壱貫六拾七匁弐分六厘

外ニ金三分

右者申七月分御紙筆墨料

書面之通御座候以上

申七月

橋渓郎

覚

五月五日ゟ

勤日数九拾七日

此筆墨料銀拾弐匁六分七厘

御紙料銀百六匁七分

但一日

筆墨料銀壱分三厘ツヽ

御紙料銀壱匁壱分ツヽ

元出役猪九助

関口雄助

銘合銀百枚宛ニ而被下候

清水助右衛門儀去七月十二日御金三百両上ヶ下ヶ

下ヶ候

右ハ去五月六日出し置候御付紙之和字所出段

御目録書面之通ニ而先達而御別紙ヲ以申上候

以上

申七月

橋沢　印

一八月十六日昌平坂学問所方

当月廿七日新蔵共ニ　御出候

年之御例
等有之

一同八月二日昌平坂学問所方新蔵江被申之段

清水助右衛門白銀拾枚下ヶ之通去例年御座

候し

一十月十四日道之道路組合より廻状来

覚

清水儀兵衛

林出羽守殿御支配
和字村
清次郎

一 二ヶ五人扶持
右者州出庭谷道造組合高三百八拾壱石五斗
清次郎儀多年間以三拾年間之八間百石し
割合ニ而差支出精有之候処先達而扶持被
下置候書面之通相勤候ニ付右組合入高割ニ而
奉伺候以上
六月三日
〇〇〇〇内
伊東〇〇清

右者清方ニ伺書
清次郎儀高五人扶持被下置候処右扶持五俵高以
来組合入ニ而被下置候様御達以
右伺書清方付札ニ而九月ニ相成候趣
一 十一月廿七日 林家ニ而御達之
覚
布衣以上地方同様之両奥向而正年ニ御扶持と
御手当御座候扶衣ニ被渡候ニ京都地下ニ而御座候

用候由ニ候得共通り之儀ニ付此段相伺申候
候事
一　同廿八日大沢印ヲ以て尋書遣し林家ゟ抑染
布衣ハ地並同様之画具ニ而平年ニ相揃之積ヲ
以御手掛衣ニ准し京都地下之者用候由ニ候
其通り之儀ニ候ハヽ当御印ヲ以申来候右之
装束料類ニも相見候平候御手元尚時織物之
御分ニ地並ニ付候ハヽ候画具之内揃積ヲ候半
相伺候事も御座候へ共地下之者ニ付不申
候上ニも御用候哉も相尋候処猶又八一統
ニも承り積之趣も候処ニ付御座候処左も可之通り承知
事ニ而右様之者相伺候得は其段承知仕
十一月　　橋沢　印
一　十二月林家ゟ出来候御装束料書付
覚
装束之内
銀五枚
外ニ五枚七月之分有之申候
諏訪若狭守

於江戸
銀七枚　弥三郎七月ゟ家来之由　頓宮平次郎

銀五枚　石井源次郎
勤日数百三拾弐日

銀五枚　金田元輔
勤日数百拾九日
右源次郎元輔両人分
延日数弐百五拾三日

江戸詰年料銀弐枚宛六ヶ年之内
化政三年対馬守三日年季て
年季延年中三百日年限て
当月分下出勤相成候
中山平四郎
勤日数百拾七日
同　井口権兵衛
勤日数百拾四日
同出役　吉田忠三郎
勤日数百三拾七日
須江善右衛門
勤日数百三拾弐日
児山勝之進
勤日数百三拾七日
小野傳右衛門

勤日数百三十七日　　峯地五郎右衛

右ハ四月以下七人分

延日数九百拾壱日

此筆墨料銀百拾目弐分壱厘

但右同断

此内持料銀壱貫弐分壱分

但一日銀壱匁壱分ツヽ

都合銀弐拾弐匁壱拾卜壱貫百弐拾九匁九分弐厘

外金三両弐分

申七月ゟ十一月迄
勤月数五ヶ月　　助筆　小倉孫太郎

同
勤月数六ヶ月　　同　石川城之進

右毎人分

延月数拾壱ヶ月

此筆墨料銀五拾弐匁五分弐厘五毛

但壱ヶ月
筆拾對　三匁ツヽ　四分五厘
墨三丁　挺料　五分弐厘五毛

楷書九拾弐枚
草片仮名百弐拾弐枚
行楷仮名百拾三枚
楷書弐百弐拾弐枚
真片仮字百四拾六枚
行楷仮字百四拾四枚

助学　生田長三郎

同　寺山義次郎

右両人分

楷書三百拾六枚

此筆墨料銀四拾六匁九分五厘　但壱枚ニ付三分五厘ツヽ

真片仮字弐百六拾九枚　但壱枚ニ付壱分五厘ツヽ

此筆墨料銀弐拾六匁九分

行楷仮字弐百五拾七枚　但壱枚ニ付八厘ツヽ

此筆墨料銀弐拾目五分六厘

手跡助学筆墨料

銀百四拾六匁六分八厘六厘宛も

右高書之下ニ御手当之儀筆墨料并墨料出雨

之通御座候以上

申十二月

塙次郎

一
十二月　日御徒目付[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]書付[illegible]

文政八年

御用紙定式之事

右御作事方[illegible]新規定式之[illegible]

当御取[illegible]

十二月　[illegible]林[illegible]書付

一文政八酉年
九月中
清書用紙之儀ニ付林家ゟ申出候

覚

一史料清書紙唯今迄調進残紙凡千枚程
[illegible]処

冷泉記　七冊
右一冊五十枚積
此料紙三百五拾枚程

因敬記　廿八冊
同断
此料紙千四百枚程

蓬山記　八冊
同断
此料紙四百枚程

外
武家名目抄

職名之部　七拾冊程

凡一冊五拾枚積

此料紙三千五百枚程

〆百十三冊五千六百五拾枚程

外ニ袋紙表紙裏　三百三拾九枚

中入紙　二千八百廿五枚

惣〆八千八百十四枚程

右史料中書出来仕候ニ付清書ニ取掛申

度奉存候右武家名目料紙之儀是迄之経験次第

清書仕候節書損共凡九千枚之積御座候

紙弐千枚引　七千枚程生紙ニ而請取申度

奉存候以上

酉九月　堀洪郎

右之通申出候ニ付右通清書用紙被成下候様

仕度奉存候以上

九月　諏訪庄右衛門

一 十月廿七日林家ゟ来書

以手紙致啓上候、先達而御申立有之候
英語箋七千枚相下り候ニ付、請取人
御差紙ニ付候、紙合十四束西脇へ罷
越有之候間、左様御心得可被成候、請取人御出
可被成候、右之段為可申述如此御座候、以上

十月廿七日

鍋嶋平次郎

請取り候
林家手代
山田久四郎

一 御紙料并摺料共御渡ニ付林家へ書付
和紙壱束ニ付御渡金
一 七千枚御摺料
一 紙拾枚
此月分四百三拾四

諏訪庄右衛門様
鍋嶋平次郎様

一 一印五枚て
一 銀拾枚
此目方四百三拾匁

一 丁銀ニ而
金壱両弐分

一 古銀ニて十一月廿九日より
銀拾枚六匁八分三厘

（西井屋清兵殿
金田元勝殿

右沢丸姫神ニ而
右為人中日高

右目之内より小出後見
草子料

但草子料六匁八分三日ニ付
壱挺壱匁五分ゟ百日ニ挺

一 右同
銀七百六拾七匁七分

一 右同
銀七拾七匁七分七厘

一 右同
銀四枚七匁七分五厘

（右目之内下々渡ル
右御料共延日数七百
七拾一日七人銀壱匁
壱分宛

（右同 草墨料
一日壱人壱分壱厘て

（右目之内正月ゟ渡ル
草墨料 一ヶ月
一人銀四匁七分壱厘
五ヶ年て

〆 金壱両壱分
銀三貫壱百八拾七匁五厘
此金弐拾七両壱分ト銀拾四匁五厘

但 此内金五両弐朱備金壱両壱分
三拾七両壱分ト渡

外

銀四拾貫三百七拾匁二厘
此金六拾両三分ト銀壱匁二厘

御年貢完済耕料

惣合金三拾壱両三分銀三匁弐分七厘

但 此内備金三両壱分
三拾両ト渡

右 十二月

文政九年
定式奉書之
辞去役様一件
盆中日尚
晋中日尚之
年月不分明難渋年々記之分
右押人之一件
水戸殿ゟ瀟湘八景詠歌被出来

文政九年

一二月六日柴田安一ゟ書状

覚

群書類従彫刻料之義壱枚ニ付銀六匁五分

ツヽ振出シ六匁返済ニ付ニハ振六七匁程ニ而出来仕候ニ

中本板下出シ雑費ニ相加候而平均振目種ニ

相成申候左候得ハ金銀ニ六百六拾匁毎ニ

万三千七百振九枚ニ而銀六百三振七貫八百九

拾万此金五千六百拾九両ニ当り此度ニ差候

ニ而書紙料摺代拾匁九大概拾枚ニ付壱匁

名録并ニ京屋假名并壱人表紙袖紙綴手

間出来候迄ニ而凡積ニテ全部ニ而合金

四拾八両程ニ相成候

右全部之仕立用紙料拾四両程摺手間

此両ニ壱ケ程表紙袖紙綴其外ニ而壱冊

ニ付四百位ニ而此壱冊ニ付　合四両弐歩程ニ相成

一 右全部之雑費ハ凡弐百両程相懸

り候

右之通ニ而都合摺立候而凡金壱万五百六拾

両程相掛申候此内金弐千両程ハ先用ニ　拝借金四千八百

四拾両程者彫刻手間賃廿両程相懸り候而ハ

料之御改正御遣被下候上ニて江戸表ニ弐拾両程

入用ニ而右摺立候ニ付右之通相成候ニ付

右之御趣意ハ全部御摺立被下候様ニ而

御通帳御渡候事
右者前々ゟ被下御通帳御渡候冊数弐冊宛
是迄者当家ニ而諸事取計候処
旅宿ゟ相頼ニ付取計置候得共
料金之義者前々ゟ半分ニ而
割料者通ゟ之利息ニ而用済之事
当分相勤候得者右之通可致候
一 聊之事共無之様可致候　以上

二月　　　　　　橋次郎

一 七月中御尋有之候ニ付林木御定之節
和紙
一 紙拾枚
但目方四匁之積り
（諸坊方御用之紙　但弐拾枚）
一 紙四拾弐束壱分
（右目之以上御用紙　此之人ゟ料）
一 紙八拾壱束八分九厘
（右目之以下御用紙之分　此人ゟ墨料）

一 銀八百壱拾八匁九分
（茶園銀之分
内綿料

一 銀三拾八匁弐分
（内月々[illegible]以上内出銀
自分之[illegible]出方
筆墨料

〆銀壱貫四百七拾八匁一分
此金弐拾四両弐分ト銀[illegible]
但[illegible]
銀六拾[illegible]

外

一 金壱両弐分
（内[illegible]
[illegible]年分

一 金五両弐分ト銀五分六厘
（[illegible]
筆耕料

〆金六両弐分ト銀五分六厘
但[illegible]金[illegible]

総〆金弐拾九両壱分ト銀五匁弐分七厘

戌七月

一 十二月六日当金[illegible]
和字[illegible]金

一ヶ年拾枚ゞ内
一銀五枚
此目方弐百拾五匁
諏訪五左衛門殿

一ヶ年五枚ゞ
一銀拾五枚
此目方六百四拾五匁
小笠原右近殿
西尾隠岐守殿
金田之橋殿

一銀三拾四貫八分七厘
（右以三分 御年寄料）

一銀七百八拾四匁
（右目方六十八匁也 御領料）

一銀七拾五匁八分四厘
（右目方 御年寄料）

一銀弐拾三貫八分七厘毛
（右目方以上ハ御年寄料）
大銀弐貫六百九拾七匁九分八厘五毛
此金弐拾四両弐分永百十六文
此銀六貫九分七厘
但此度御蔵金壱両
銀六拾四匁ツヽ
（右銀高御年寄料）
金壱両弐分
金四両弐分銀四匁八分厘
（御年寄料）
〆金六両銀四匁八分八厘

此外両隣金壱分六拾弐匁
二口〆金三両弐分壱朱也　銀四匁三分五厘
一　年月不知之分
一　閏月十三日林蔵ゟ申遣し候押込一件
覚
昨夜中開辨し者無宿人弐人召捕ニ付
下河原町三ツ押門外ニ而川端出ゟ松平

安房守殿御同心廻り方捕方役引受候ニ付
候ニ付此段御届申上
閏月十三日　　捨次郎
右ニ押込之儀ニ付山名川御通り筋取候処
之者捕方当候　忍ひ来り候ニ押込好来並ニ
召捕候儀ニ而御座候処大ニ押込し
為御届　日吉　権右衛門
一　此相門前ニ而捕ニ付無宿人壱人召捕

始末以御座候ニ付而ハ御沙汰も無之候
之此段是非御座候迄ハ御差図も之
下谷辺迄参り候処何れも御座候
右此段何れも弁理金田出羅と之談ニ出
之候ハ始終合力之儀共承知致し相成
之旨申上辞退通例し相成候ニ付之節何
其上又合力之儀事中無之少々
節合力之儀も可申上候相成御座候

有之候得共中重而相成候又御同人ハ数年
之大揚ケ如何之辞と相成候間何分之
之候場此節辞退二合力以之し其段候ても
取り候様一毎人共も無之先般御座候
去年以来一向此方ハ差当り候得共乙辞退
先門道も承知いれも夜も家相成
訳有之ハ弥承知し又々取候
辞退致し御座候御承知門道

こも貴殿何レニも壱ツハ宗匠今日以て
呈上せしめ度存候而一首も相
くも有之候ニ付宗柳縁ニ而御頼申上
上ヶ候而已ニ御座候も進覧仕ニ一ノ品
筆色も無之ニ而其ニハ宗匠御手紙も
挨拶ニ及ハ茶も難斗御心配御免押
御頼申上候

一年月日宗匠水戸殿へ被成御差出

瀟湘八景詩歌

此詩ハ南宋ノ瑩玉㵎カ作ナリ　古抄ニ
白居易カ作トシ或説ニ東坡カ作トス
共ニ非ナリ　歌ハ冷泉中納言為相卿
ナリ

右貴宰中宗川一翠子カ手本ニ依瀟湘八景
詩歌ニ序ニ相添差上申候以上

十月　　信次郎

文政十年

御触書并口
鍛冶職人之述書
七月六日大嵐
お
和田甲斐守手新蔵

秋二百十日之件
行徳領堤普請之節御代官
　附り吉利
は尾張中納言
菊屋同氏方より出火

文政十年

二月十四日林家へ御来

開口

夫此風のおこる始ことのも深くある

よもにたかくまれなるかくしあ山[illegible]歳千

代も寿[illegible]栢はるかに陰のくもつきさく

[illegible]の古事の[illegible]やうや

夫ハや[illegible]年[illegible]朝[illegible]

新町角の桜の図にて花ちかき
見ゆるなれハ先々みなけりけるや
是あるてよりも心やさしくたのしみまいれ乎
くるゐ山峯の紅葉ちりてとよみつる
身のことをきハ先々むつけりけるとや
是者皆其時の桃栗の花けりき花けるとく
去やし角の桜の花もちるまひとの書
ともくけれとも詠しけれハ是をとめて清

代あれハまてたりけりけるや
一 四月林の祭あれハ

高成百俵

民部少輔
浅経

右僧某法印

右某法印者和歌并信知其者ニ候
是ハ私成来候者也民部少輔家老申付
候由ニ而當所可申上候様ニ存候旨
[illegible]上直ニ其後之熟談仕候[illegible]新

之處先例も無之候得共達治郎今日出勤節ニ付
御内々同役中江申合候處 此段申上候 [illegible]
達候之趣承知候處 [illegible]

一は
四月十七日林昌寺乞雨之事

差出候
月番記
添役　目付衆上
石橋達治郎

二百俵
内弐俵百四十五俵
安達治郎舗有之候ニ付我身和ニ而御沙汰

我身之外之者御附番ニ付上
御安達治郎儀父ニ付此上御沙汰人目付
御届ケ申上候達治郎儀ニ付宜敷之百年
十一月十六日我部之御總役之儀御直
申ニ付我役所
四月
横　治郎

一ぬ
四月中林昌寺
御使ニ申上候也

一私共和字地ノ稽古御座候ニ付此度御申
録書付ヲ以御調ノ上ニ而今ニ新出致候ニ付
此度御達〔?〕之通〔?〕此段〔?〕可申上
一四月中拝借仕候〔?〕読録書致候之趣

覚

読録書拝借写本〔?〕之趣〔?〕一年〔?〕迄
参考〔?〕〔?〕〔?〕相〔?〕〔?〕〔?〕
上〔?〕清書中〔?〕〔?〕〔?〕

一筆耕一日ニ楷書八枚宛出精致候ニ付
ニ而左之通リ
但唐紙清書并楷書〔?〕〔?〕
楷書唐紙十行二十字宛一日五枚之積
行書唐紙十行二十字宛一日ニ八枚之積
草書行書〔?〕一日拾枚之積
清書
楷書一日四枚之積

三

行方一日六ツ時ゟ始
筆工一日八ツ時ゟ始
一中清書紙三メ六百弐拾枚九分程ニ而
一清書用紙百枚ニ付弐拾弐匁銀目程ニ而
一清書料紙屋仕立代三枚ニ付弐匁五分位
一綴表紙糸とも壱冊ニ付銀弐分ツヽ是付清
書本編之通ニ而出来申候
右之通ニ御座候得共年明迄ニ相成候事

上ゟ御尋之趣御座候所右振割ニ而宜
乃様有之候ハヽ上ケ可申旨被仰付候
ニ付上
寛政四月　日　　　　橋　治郎
一六月廿日写本壱部出来
　但六冊
一橋本殿右写本上ケ申候ニ付年限ニ而御渡ニ相成
候事ニ御座候得共右之通上ケ申候

御勝手方年中申上候ニ付、此段ハ一件
出雲様御手当申上事候元治上京被成候
其節御仕法之儀（御文之）被仰渡候ニ付御請
同人申上候處御沙汰之趣ヲ以右之通
御勘定所ヘ申上候處御聞済御取扱
御役方事被出雲様ヘ御沙汰ニ而上年者御届ケ
御勝手方ニ付其段被仰付候者難有仕合ニ奉存候
一 勝手方御調進之上御用之者御沙汰可被成候

右之趣申上候處、別紙之通御文庫ニ
差納候ニ付、御用向之儀者ニ而重々
御同人ヘ申上候ニ而申上候事
御勝手向之義、右御勝手方被仰渡候

六月廿日　　勝　作　印

宗田御役所

一 同日御同人ゟ上ヶ候

一 私共ゟ差上候ヲ以御支配様ヘ申上候年

今日蔭之儀ハ史籍御用取扱其過ニ而稀
觀有仕合奉存候就ニ者兼而存意在候
義も年来世話仕候ニ付華ト上之ニ雖無
遂ニ彫刻仕候奉存候右之史料者ハ日本
紀並ニ幸主編年記類纂之伝模本を世上ニ
相行ニ云々成就ニ而順ニ而存候得ハ尤是非
紀並編年記共ニ手到ハ難量尤も取計
申上候事実料ニ而関係仕候奉存候ハ是非

刻料追様ニて毎年御手数相増し候ニ付今
九段猶又彫立ニ而御座候様致度奉存候
仕年ニ数冊相成候而ハ出来仕候奉存候
（右ニ史料ハ一向ニ写本も不相成無上）
聞も定而出来候ニ付右等之基と奉存候
願者ニ而定而難有仕合ニ奉存候ニ付
御沙汰ニ而御用ニ成相仕候御取計之程奉願
上候以上

六月

塙次郎

以書付奉伺候覚

一去ル戌年十一月中家紀取集候様被仰付候
新写本二通文庫より御納被成候
写本相渡り一部御納ニ相成候得共宜敷
父当年罷成候此程取調被仰付候
此度当御改之被仰付候ニ付御用等御聞届
候御写被下候而雑記書等差上候様ニ
一緒ニ御座候ニ付二十年許之世

候得共右ニ付而ハ家ニ所持仕候写本御文庫ニ
御納ニ相成候写本之為御内々拝借仕度御願
候得共右之儀御聞済被下候様奉願上候
以上
六月　　　　　　橋沢郎

一別紙
文政年中相伺候様年ニ相成候
御本丸　御役所御知行和書之内御尋可申候

此者木山東申候ニ付　評議之上同人
於道年多病ニ而成功之上御用之儀
有之割合申上候通手数殺書申上
稼御鉄砲ニ而取立当分之御用之
差ニ而出来候ニ付右之趣ニ付御同心上
再役相続之後夫々何卒御取立之
御成事ニ付御吟味之上御沙汰可被成
下候ニ而御願申上候

六月　　　　　　　　　　橋　渕之助

一七月御用之儀御尋合之上
　和田長和同道

一銀ニ而
　皆済四百五拾両

一銀之儀ハ何分之処

牧野主殿頭
甲斐長吉郎
中條出羽守
寺田次郎兵衛
石川備前守
曽我豊前守

一銀三貫三百四拾四匁七分五厘

一銀百六拾目弐分八厘

一銀弐貫七百拾弐匁八分

〆銀弐貫七百六拾三匁六分八厘五毛

此金[illegible]両[illegible]分ト四匁弐分五厘

此金[illegible]匁壱分五厘

右ハ御年貢
内壱貫[illegible]
[illegible]以下[illegible]
[illegible]
[illegible]料

[illegible]
[illegible]料

池
内[illegible]
銀[illegible]

内[illegible]
内[illegible]分
[illegible]料

残

金弐拾両[illegible]分

金七両弐分銀[illegible]

〆金[illegible]両三分銀[illegible]

但
金[illegible]
銀[illegible]

惣合金三貫[illegible]銀三[illegible]八厘

[illegible]七月

一八月廿三日林家江御使
私共和之此一橋御屋形所勤方仕候
願置候処新内昨廿三日へ参候儀 [illegible]
御下知被仰付候様御頼申上候
八月廿三日　橋 [illegible] 印

一
一十月廿三日林家江出ス
覚
一尾張殿御屋形御用之節家来罷越候節

用之節罷越為御礼参候儀御届申上
事故以手紙申上候様御頼申上候
猶又御用之節御願申上候様奉頼上候
御座候様御頼申上候以上
十月十四日　橋 [illegible] 印

一
一月二日尾州御屋形御用向御頼申上候
得其意存候
覚

一 此度当地拝授門人名前拝授也此外
者猶も可絶候事共今以て難相成候
年当地拝授御覧被此節之所も相成節
叶於免候事相成候に付遠く上京之上越、
次第御出京候て之所彼是之伺
居候節合之御座候趣を内聞仕り
奉願候間宜御取計可被下候以上
先年正月中之通是被下候

覚

一 此度当地拝授門人名前拝授之通
より相伺仕候て義御座候書付差上
京都へ伺候御沙汰被下候以上

月 日

橋 印